

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2010 年度第 2 回研究会報告書

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

2010 年度第 2 回研究会

日時 2010 年 09 月 25 日 (土) 午後 13 : 00 ~ 18 : 00

場所 : AA 研セミナー室 (301)

報告 :

1. 共同研究員全員

『叢書 : 知られざるアジアの言語文化』について

2. 共同研究員全員

「成果論文の構想について」

3. 生駒美樹氏 (東京外国語大学大学院)

「茶をめぐる民族間関係の人類学的考察—ビルマ (ミャンマー) における茶の生産、流通、消費を事例として」

研究会開催の趣旨

本年度は当該共同研究プロジェクトの最終年度に当たる。そのため、第一回の研究会では成果論文集を作成する叩き台として主査のダニエルスが昨年刊行された James C. Scott *The Art of Not being Governed: an anarchist history of upland Southeast Asia* を紹介した上で、成果論文集の柱となる課題を提起して、共同研究員に議論して頂いた。その議論の結果、今回の研究会では執筆予定者全員に 5 ~ 6 分程度口頭発表して頂いた。

また、この度の研究会のテーマは生業とエスニック・アイデンティティーであった。今年の 3 月から 4 月にかけてミャンマーのシャン州でパラウン族の茶生産について実地調査を実施した生駒美樹氏に発表して頂いた。(唐立)

報告の要旨

1. 『叢書 : 知られざるアジアの言語文化』について

ダニエルスから樫永真佐夫共同研究員が『黒タイ年代記<タイ・プー・サック>』の原稿を完成して、本年度の秋に入校ができることが報告された。(唐立)

2. 「成果論文の構想について」

8人の執筆予定者は、各自が成果論文の構想について作成した資料に基づき、それぞれ5～6分程度頭説明したのち、参加者全員による質疑応答が行われた。執筆者と論文題目（仮題）は下記の通りである。海外出張中の村上忠良と片岡樹両共同研究員の資料はダニエルスが代読した。

1. 吉野 晃「タイにおけるユーミエンの家族構成の社会史—合同家族から核家族—」（仮題）と「タイにおけるユーミエンの農耕の変化—焼畑耕作から常畑耕作へ—」（仮題）
2. 西谷大「定期市からみた山地民の交易と生業戦略」（仮題）
3. 村上忠良「シャン仏教諸派の歴史：東南アジア大陸部の宗教フロンティアの研究」（仮題）
4. 片岡樹「山地民ラフにおける国家と権力の概念」（仮題）
5. 山田敦士「文字を持つこと、使うこと：雲南ワ族の事例から」（仮題）
6. 新江利彦「ベトナム諸民族における征服史観と被征服史観をめぐる一考察」（仮題）
7. 富田晋介「内戦から農業集団化期における土地利用—ラオス北部低地村の事例から」（仮題）
8. ダニエルス「タイ族政権運営に参画する山地民、しない山地民：雲南徳宏の事例から」（仮題）

(唐立)

3. 「茶をめぐる民族間関係の人類学的考察—ビルマ（ミャンマー）における茶の生産、流通、消費を事例として」

本発表では、ビルマ（ミャンマー）における茶の生産、流通、消費を事例として、茶をめぐる民族間関係を、人類学的に考察することを試みた。

ビルマでは、古くから茶を飲用としてだけではなく食用としても用いており、食用茶は儀礼やもてなしの席に欠かすことのできない重要な意味を持つものであると指摘されてきた。一方で、その生産は茶の原産地とされる中国雲南省と隣接するビルマ北部シャン州ナムサン郡に居住する少数民族パラウン族と結び付けられ、ビルマ王朝がパラウン族に茶の種を与え栽培させたという伝承がある。しかしながら、これまで茶を介して生じる民族間関係に関する議論はほとんどされていない。

本発表ではまず、ビルマの茶消費について、その歴史と消費実践、社会的意味を考察した。ビルマ族にとって食用茶はビルマ伝統文化を表象するもののひとつであり、また食用茶、飲用茶ともに、ビルマ社会における人間関係の構築に不可欠なものであることを示した。次に、ビルマの茶生産について、ビルマ最大の茶産地シャン州ナムサン郡におけるパラウン族の茶生産の歴史と生産実践、茶生産の社会的意味を考察した。茶生産に依存したナムサン郡のパラウン族にとって、

茶は経済的に重要であるだけでなく、彼らの民族表象を支えるものであることを明らかにした。最後に、ビルマにおける茶流通の歴史と現在の流通の考察から、ビルマ族とパラウン族の民族間関係が、茶の流通に影響を与えてきたこと、また茶を通して民族間関係が構築されてきたことを論じた。そして、ビルマ王朝がパラウン族に茶の種を与え栽培させたという伝承が、ビルマ独立後に広まった可能性を示し、ビルマ独立以前、シャン族の強い影響下にあったパラウン族社会が、ビルマ社会に編入されていく過程で創造された可能性について論じた。

以上、本発表では、消費、生産、流通の側面から、茶をめぐる民族間関係の考察を行った。茶にまつわる伝承には、茶を通してビルマ社会にパラウン族を取り込もうとするビルマ族と、ビルマにおける茶栽培の正統性を主張することで積極的にビルマ社会へ同化しようとするパラウン族という、多民族国家における民族間関係の政治性がみられることを論じた。(生駒美樹)

生駒さんの発表に対して活発な質疑応答が行なわれた。まず、パラウン語とビルマ語での茶の名称、茶葉の見分け方やビルマ族は何故つけもの茶を食べ始めたのかなどについて質問が集中した。次にパラウン族にとって茶が彼らの民族表象になった点については、コンバウン朝の史料などを利用してビルマ王朝とパラウン族の茶生産との関係を明白にした上で、植民地時代において茶産業の変化を分析すれば民族表象としてのイメージが深化するのではないかという意見が提出された。また、発表者の調査方法については、調査地のナムサンのパラウン族だけではなく、周辺地域の民族と生業に関する基本データを収集すべきなどの意見が出された。さらに、パラウン族の中ではナムサンのパラウン族が極めて特殊である点に留意すべきである指摘もあった。(唐立)